

本を中心にして―』、『パーリ学仏教文化学』第二十三号、二〇〇九、九一頁）。アユタヤー期のもので特定できる Wat Hua Krabu（バンロク）、Wat Lat（ペトブリー）の二写本、それにフランス極東学院（EFEO）所蔵写本（EFEO PALI 40）を対照しながら、全体の中で最大量を占める Mahābuddha-guṇavarāṇa の部分について、現在解読を進めている。

それによると、まず東南アジア地方独特の表記（例 saṇḍa を saṇḍa と表記等）はともかくとして、パーリ語の荒れは否めず、解読の困難な箇所が多い。また、写本ごとに言及する事柄の序列に異同があつて、仏徳の讃嘆の形を体系的に捉えることを難しくしている。さらにこれらの写本は、死者の供養のための施本とされ（田辺和子前掲論文二〇〇九、七四頁）、当時の葬送の状況や死生観について貴重な資料を提示するものだろうが、仏徳の讃嘆からアビダンマ七論に至る階梯をどう理解するかは、今後の研究を待たねばならない。

東南アジア撰述文献として、これまで先行して取り組んで来た『パンニヤーサジャータカ』（拙稿「パンニヤーサジャータカについて」、『宗教研究』第七十七巻第四輯、二四七―二四八頁、同「パンニヤーサジャータカ研究の課題」、『同』第七十九巻第四輯、二四七―二四八頁、同「パンニヤーサジャータカ研究の意義」、『同』第八十三巻第四輯、三九三―三九四頁等参照）は、東南アジア土着の物語を基にしたものが多く、それが本生活の様式を採ること、民衆の仏教化に大きく寄与したと考えられる。一方、ここで取り上げた折本紙写本に見られる内容は、出典をパーリ三藏に求めながら独自の編纂を遂げたも

のであり、実際に葬儀式等の儀礼に用いられることで、民衆に浸透していたと思われる。

東南アジアは、歴史の激動や社会情勢の影響を大きく受けている地域であり、それらが仏教の伝承にも色濃く反映していると言える。東南アジアに独自に伝わる仏典の研究は、近年本格化しつつあるが、忘れてはならないのは、当地に伝承された上座部仏教が、まさに現代に生きた教えとして流布しているという事実である。東南アジア独特のパーリ語を読み解いていく言語上の課題、現地の文化の影響を視野に入れた仏教の解釈、それらは過去の仏教研究の常識を許さないものである。その意味で、研究にはハードルの高い歩みを強いられるが、従来の仏教を巡る文献学のあり方を問い直すことにもなるだろう。

新発見安世高訳『十二門経』における

写本構造上の問題点

洪 鴻 榮

一九九九年に発見された安世高訳『仏説十二門経』『仏説解十二門経』という書写文献は、初期の訳経史を説明するにあたって重要な手がかりになるに違いない。道安の「十二門経序」にある幾つかのキーワード――「三向」、「滅外止鹿」の「外」、「進消内結」の「内」及び「諸仏嘉歎記其成號」の文は、ちょうど『仏説解十二門経』中の「向三」または「三向」、「内」「外」そして「受剎」に該当すると判断できる。つまり、道安

の見た『十二門經』のテキストは、『仏說十二門經』『仏說解十二門經』を含めたのみならず、三八四―三八五行「仏說如是弟子歡喜受行」それ以降の文とも連写されたと見られる。つまり、この『十二門經』の構造は、金剛寺・書写テキストの『仏說十二門經』と『仏說解十二門經』のほか、「仏說如是。弟子歡喜受行」の後の三八六―四〇六行の部分も含まれ、三つの部分を併せて作られたと推定できる。また道安の見た『大十二門經』の内容は、こういった三部分の内容を除く、四〇六行から最後の文までであると見られる。「大十二門經序」が述べているように、「この經に後記」あり、また「前世にも懸解」あり、さらに道安が注を作ったという「今為略注。繼前人之末。」の文章もあるものの、今われわれの見た写本では「後記」も「懸解」も「略注」も見られない。つまり、道安の見た『十二門經』『大十二門經』とそれに類似する金剛寺・書写本中の『仏說十二門經』『仏說解十二門經』があるとするとそのもの、それぞれの構造は、異なるものであるとも考えられる。

安世高の訳經における構造上のスタイルの一つとして、一つの著作中、原始テキストの文と解釈の文との両方が連写されたこともある。このような例の一つとして『八正道經』が挙げられる。安世高訳の『仏說八正道經』の前半の文と『雜阿含經』七八四經とは、ほぼ同本異訳の關係を持つと見うけられる。二經の内容はともに「世間八正道」について講じている。しかし比較すれば、『雜阿含經』の七八四經は『仏說八正道經』の後半の内容を欠いている。これが『仏說八正道經』の後半の内容は原始的な經文でない証拠になる。しかし全經の最後にも經の終

りの構造式…「仏說如是。皆歡喜受」が付けられている。このような構造は、『仏解說十二門經』の第十二門の最後にも見出される。また、『仏解說十二門經』の十二門(第三六七―三八四行)の内容と『仏說十二門經』中の第二組の十二門(第三四四―三六五行)とはほぼ等しいものであり、前者の文意は後者より簡単に理解されるので、『仏解說十二門經』の文は『仏說十二門經』の原文に対して解釈文の役割を持つとも考えられる。

『仏解說十二門經』の第十二門(第三八三―三八四行)の後に引き続き、「空為第十三門」(第三八六行)の文が連写されているので、このような文は、終りの構造式によって切断されるべきではない。

筆者の仮説では、元來の『仏說十二門經』の經文と『仏解說十二門經』の解釈文とは連写された文であり、両者の間には「仏解說十二門經」という経題がまだ付けられていなかった。しかし解釈すればするほど解釈文が積み上がってきて、しかも解釈文の量が原文の量より多くなったので、「仏解說十二門經」の経題は付けられた。結果として、経題の前後には二つの文が区別された。当然、このようなことは安世高の時代にすでに発生したとも予想される。つまり、今われわれの見た『仏說十二門經』、『仏解說十二門經』の写本は原始的テキストであり、少なくとも道安の見た『十二門經』と『大十二門經』より古いものである。